

サ  
ト  
ウ  
サ  
ン  
ペ  
イ

の  
ド  
タ  
ン  
バ  
の  
か  
み  
だ  
の  
み  
神  
頼  
み

朝日文庫

---

かみだの  
ドタンバの神頼み

朝日文庫

---

1999年6月1日 第1刷発行

著 者 サトウ サンペイ

発 行 者 岡 本 行 正

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(3545)0131 (代表)

編集＝書籍編集部 販売＝出版販売部

振替 00100-7-1730

© Sanpei Satō 1989 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

---

表紙・扉 伊藤鑛治

ISBN4-02-264200-9

---

# ドタンバの神頼み

---

---

サトウ サンペイ

---

単行本は一九八九年、光文社より刊行された。

(原題『ドタンバの神頼み―僕にとって神さまとは』)

## ドタンバの神頼み 目次

### 神さまは永遠の父母

プロローグ 10

お母さんの代わり 12

神さまは私の好物をご存じ 20

マンガ家になりたてのころ 29

友人に見せてもらった神さまの威力 34

おまえの弟は信心しておるッ 41

宗教で争うなんてあんまりだ 49

## 天地の間に生まれて育つ

地球は“人類の乳房” 61

女性は神さまに近い 64

アイ・ラブ・オール 即 オール・ラブ・ミーへ 70

パンツにも「ありがとう」 74

腹を立てると体をこわす 80

悪い“さだめ”も氷のようにとけていく 92

子孫はんじょう 家ははんじょう 100

## 宇宙から見た時間と空間

信心ビギナーと本チャン信者 108

神さまの時計とメガネ 120

超能力だけでは人を救えない 133

だれでも、いつでも会える「教主さま」 140

初めての店には入りにくい 145

私の好きな宗教の共通点 156

み教えショート・ショート 160

毎日を元旦の心で 165

「ドタンバの神頼み」から十年

「ドタンバの神頼み」から十年 168

幼稚園の信心 170

一年生の信心 172

二、三年生の信心 175

先生の信心 178

どこを見るのか 181

かわいそうにと思う心 185

外国で思ったこと 188

ア・ハッピー・ホーム・レシピ 192

おわりに 196

対談 信心・生活・仕事 へひろたまさき 201

巻末エッセイ 三浦朱門 227

# ド タ ン バ の 神 頼 み



# 神さまは永遠の父母

## プロローグ

私は五、六歳のころ、母に連れられてよくT教会に行った。

その教会は大阪中之島の近くにあった。大きな総ひのき造りの建物で、二層の銅板ぶきの大屋根が美しい勾配を見せていた。中に入ると、何百畳も畳を敷いた大広間があり、そこに上がって座った。当時は、非常に神徳の高いY教会長がご在世のころで、いつも朝から夜まで大勢の信者が、お願いしようとお参りに詰めかけていた。私は母がお祈りをしている間、畳の上を走り回ったり、教会の塀の内側で遊んだりした。そこに同じ年ぐらいの男の子たちがいたので、鬼ごっこをしたり、かくれんぼをした。今、思うと、その子どもたちが教会長のお孫さんたちだったようだ。つまり、私は幼少のときだけは、おトモダチがよかったわけだ。

母がそうしてたびたび連れていってくれたおかげで、私は中学生ぐらいになると、

試験の前の日には、なんの抵抗もなく一人で教会へ行つて、

「神さま、あしたの試験、どうかよい点とれますように」

と頼んでくるようになった。すると、不思議なことに、日ごろ勉強していなかったのに、前の晩やったところが出たりして……。

これがこの本の題『ドタンバの神頼み』の由来である。それから何十年たっても、そう変わってはいない。何かコトがあると、教会へ行つて、

「神さま、どうか面白いマンガが、あまり時間かけないでサッサッとできますように」とか、

「神さま、来月の都民税、どうか納められますように」とか、

「神さま、カゼをひきました。早く治してくださいませ。ハクシヨン！」とか、あいかわらず「ドタンバの神頼み」を繰り返しているのである。

でも、長い間に私は神さまが存在していることを信じるようになった。

「いったい、神さまってナンダ？」

私が入から聞いたことや、読んだことや、自分で感じたことを、マンガと文、つまり「絵ッセイ」風に書いてみたい。

## お母さんの代わり

小学生のころ、朝、急いで学校へ行く支度をしているとき、私はこんな体験を何回もした。たとえば、色えんぴつをいくら探しても見つからない。もう時間がない。遅刻しそうなのでイライラしてくる。そういうとき、思わず大声を張り上げる。

「お母さーん、色えんぴつどこへやったのオ！」

すると台所あたりから声が返ってくる。

「今行っただげる」

すると、不思議なことに、お母さんがやってくるまでにたいい見つかるのである。「アッ、あった」。目の前の本とノートの間には、はじっこがのぞいていたりして。ときにはそれがコンパスだったり、分度器だったり。きつとどなたにもそういう体験があると思う。



あれは「お母さん」と叫んだとたん、イライラや不安や心配をお母さんのほうに全面的に預けることができ、今まで立ちこめていたもやもやした白い霧が晴れ、目の前がハッキリ見えたからである。

だれでも子どものころは、お母さんを絶対に信頼している。

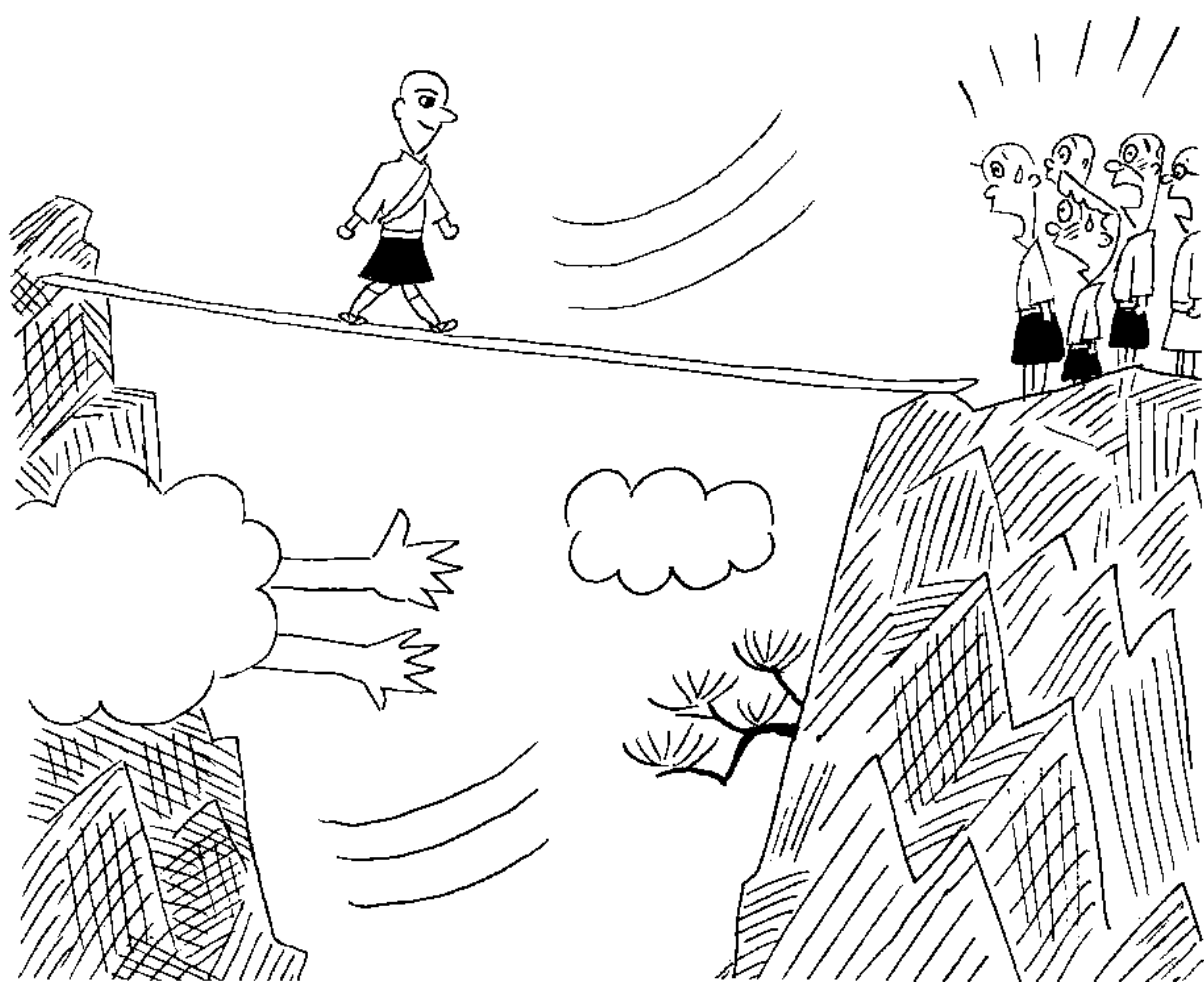
「お母さんに聞けば、なんでもわかる。頼めばなんでもしてくれる」。身も心もお母さんにまかせることができたのである。ところが、こっちが大きくなるにつれ、だんだん「母なる人」はそれほどでもないことがわかり、ついには、

「お母さんなんか、ナーンニモわかつちやいない！」などと言うようになる。もうそうなると、「お母さん」と叫んでもキキメはない。

もし、お母さんの代わりに絶対に信じられるものがあつたとしたら……。それをもし、神さまと思つてみたら……。神さまは姿も形もないから、初めはなかなか信じられないけれど、もし、ナニカのひょうしに信じられたら……。そのときは心配や不安を神さまのほうへぜーんぶ預けることができ、目の前が晴れ、なんでもよくモノが見えるようになるのでは……。信じるとは、いったいどういうことなのか？

昔、ある所に全国から修行僧が集まつてくる山があつた。その山の上は断崖絶壁になつていて、谷間には大きな丸太ん棒を二つに割った木の橋が一本かかっているだけだつた。それを渡つて向こう側へ行ければ、修行が終わつて一人前の僧になれるのだが、まだ、だれも渡り切ったものはいない。ついに崖のそばに宿泊用の小屋ができて、何日も泊まりこむ者まで出てきた。橋のまん中まで渡つて、引返してきた僧が、

「いやあ、風はビュービュー吹いているし、下を見ると、谷底の川がまるで細い糸のように見えるし、足の乗っている橋の幅は三十センチほどだし、肝っ玉がちぢみ上が



ってしまいます。私はもうあきらめて帰ります」と言って山を降りてしまった。また、ある僧などは、「私は何とか初志を達成しようと、この小屋に十年も住みついてしまっただが、いまだによう渡れないでいる」と嘆いていた。

ある日、一人のハンサムな若い修行僧が山を登ってきた。崖っぷちまでくると、立ち止まりもせず、スタスタと橋を渡り切り、そのままこっちへスタスタと引き返してきた。そして小屋の中でくつろぐと、みんながおどろいて取り囲み、「こわくなかったのか？」と聞く。